

云ひ、葛邏祿を三姓と云ひ、又た西突厥を十姓、室韋を七姓と云ふが如きもの即ち之なり、獨り東突厥に至りては、未だ其の姓を數へて之を名付けたるを見ず、されど茲に云ふ三十姓可汗なるものは、次に記する處によりて、東突厥の可汗默啜を云へるものなることを知り得べければ、假令史籍には此の名見えずとするも、當時他部族と同じく、此く姓を以て呼びたるものなるを認めざる可らず、たゞ之に就て一箇の證明を與へ得るものは、有名なるオルコン河畔の廻鶻の毗伽可汗聖文神武碑にして、其の第五行目に「九姓回鶻卅姓拔悉密三姓□□諸異姓云々」の文字あり、即ち拔悉密なるものは三十姓と稱したものなることを明らかに知り得べし、此の民族は屢々史上に見ゆるものにして、舊唐書廻鶻傳には拔息密とも書き、オルコン碑文にエニセイ文字にて記せる Basmil に相當するものなりとす、新唐書回鶻傳に附記する處によれば、其の姓は阿史那氏にして、即ち突厥と同姓なり、拔悉密の勢力を有するに至るは天寶の初にして、回鶻、葛邏祿と共に、突厥最後の可汗白眉を倒し、國人の推す處となりて可汗の位に上るに至れり、而して此の時に至る迄は、もとより突厥の一部族として、其の下に服屬したるものなりとす、因りて思ふにオルコン碑に突厥の一族阿史那氏なる拔悉密を、三十姓と稱するものは、即ち此の墓誌に默啜を三十姓可汗と云へる所以を説明するに足るものなるべし、果して然らば西突厥を十姓といへるに對して、適當に東突厥を云ひ表はさんとせば、まさに此の三十姓部落の語を以てすべきを知るべし。

可汗が Xayan の音譯なることは今更ためて云ふ迄もなし。次に見ゆる賢力なる語は思ふに突厥語の意譯にして、かの屢々可汗の稱號として見ゆる毗伽句主祿なる語に相當す、毗伽は唐書突厥傳に華言足意智と解釋せるものにして、突厥語の bilga に當り、「賢き」なる形容詞なり、句主祿は kučlug にして突厥語の「權威ある」「力あ